

論文

1930-40年代のラカンの思索における無意識概念について

非常勤相談員 河野 一 紀

1. はじめに

無意識は一般に精神分析における根本概念と考えられているが、その語が意味するところについては必ずしも意見の一致が見られるわけではない。例えば、ジャック・ラカンが1953年に「無意識はひとつの言語のごとく構造化されている」と述べたことはよく知られているが、多くの精神分析家達がこのような無意識についての定義を受け入れるかは疑わしい。なぜなら、フロイトのテキストを素朴に読んだとしても、ラカンの無意識概念を導き出すことはおそらくできないからだ。フロイト理論では、無意識とは『夢解釈』以降、ひとつの心的審級を指し示す名としての無意識とは 抑圧 Verdrängung という心的機制(防衛機制)と不可分であり、抑圧によって意識から押し退けられた表象の場として力動的に理解されるからである。対照的に、先述のように無意識を定義するラカンの理論には固有の抑圧概念がないということがしばしば指摘されている¹。この差異は両者における無意識や抑圧の理論的位置づけの相違によるものであり、それはとりもなおさずラカンによるフロイト理論の理解あるいは受容の特異さの証でもある。そこで本論では、ラカンが精神分析家として独自の理論を打ち出す以前、すなわち1930-40年代の仕事における無意識概念の取り扱いを概観し、ラカンがフロイト的無意識の独創的な読み替えへと至った道筋を明らかにしたい。この作業は、社会学や人類学 anthropologie がラカンに与えた影響の検討というさらなる課題を提示するだろう。

2. ポリツェルの心理学批判と精神分析

ラカンのテキストそのものを検討する前に、ラカンにおける精神分析の受容に決定的な影響を与えた人物として、具体心理学 psychologie concrète を提唱したジョルジュ・ポリツェル(1903-1942)に言及しておく必要があるだろう。『心理学の基礎への批判』²においてポリツェルは、古典心理学 psychologie classique に対して、当時における心理学の新たな3つの潮流 行動主義、精神分析、ゲシュタルト理論 を挙げるのだが、「精神分析のみが今日、本物の心理学のヴィジョンを示すことができる」³と述べるように、そのなかでも精神分析の革新性を強調する。そして、精神分析は古典心理学による取り込みの危機に曝されてはいるものの、精神分析は「古典心理学を充実させるものであるところか、まさにその敗北の証拠である」⁴と、両者の断絶が指摘される。

しかしながら、ポリツェルは精神分析を手放して称賛するわけではない。このことは、「精神分析そのもののなかには、心理学の二つのかたちのあいだの根本的な対立が認められる。そういうわけで、精神分析は古い心理学と新しい心理学とのあいだで引き裂かれているかのようなのである」⁵という記述から理解できる。このような精神分析が孕む分裂はまた、「根本をなす閃き inspiration fondamentale と理論の相容れなさ」⁶としても表現されている⁷。では、精神分析における「根本をなす閃き」とは何だろうか。「精神分析の根本をなす閃きはまさに具体的なものへのオリエンテーションである」⁸とポリツェルは述べ、精神分析がなした発見のなかでも、とりわ

け「夢の具体的かつ個人的意味の発見」⁹に注目する。フロイトはこの仮説から出発し、夢が固有のメカニズムをもつ心理的事実 *fait psychologique* であるという主張に至ったという。さらに言えば、ここで重要なのは、発見された夢の意味そのものというよりはむしろ、その発見を可能にしたフロイトの方法 *méthode* である。ポリツェルによれば、『夢解釈』(1900)でフロイトが採用した方法とは、従来は内観 *introspection* や直感 *intuition* によって把握されると考えられた内的生活に依拠したり、生理的原因に訴えたりすることを放棄しつつ、あらゆる実体化 *substantialisation* を回避するようなかたちで夢を位置づける方法であるという。それはまた以下に述べられるように、心的現象を具体的かつ主観的な観点から把握しようとする試みであるとされる。「注目しなければならないのは、フロイトが内観を物語 *récit* によって取って代えるやり方は、単に抽象的観点の具体的観点による置き換えではなく、古典的な対句を用いて言えば、客観的観点の主観的観点による置き換えであるということなのだ。より現代的な表現を用いて言うなら、物語という手法を採用することで、フロイトは「直観」による観点を「振り舞い *comportement*」による観点で置き換えたのである」¹⁰。こうした考えをもとに、夢は人間という主体による行為 *acte* あるいは所業 *fait* として位置づけられ、一人称の「私 *je*」との不可分性が強調される。

一方で、ポリツェルが古典心理学や行動主義、ゲシュタルト理論さらには精神分析までもを徹底的に批判するのは、その手法に浸透している実在論 *réalisme* と形式主義 *formalisme* ゆえにである。実在論とは、言葉に対応するものが実在すると考える立場である。実在論に立つならば、例えば、ひとが自らの「内面」について語るというとき、「内面」という抽象的なものがその語の指示対象として客観的に存在すると主張しうるのであり、先に触れたような「内的生活」もまた実体として存在するとされる。さらに、これは「内的生活」というひとつの「世界」を想定する限りにおいて、空間化

spatialisation を含意する¹¹。他方で、形式主義

ポリツェルはしばしば機能的形式主義 *formalisme fonctionnel* という表現を用いている

とは、原子論的発想と関係がある。原子論的発想に基づくと、心的事象は原子的要素(感覚やイメージ)とそれらを結びつける諸法則の組み合わせとして理解され、そこから心的事象の一般的な意味あるいは機能が導き出される。しかし、これは「人間の諸行動 *actions* の形態を崩した後、意味をもたず個性もない要素から出発して、意味 *sens* と形態 *forme* という全体性を再構成しようとする古典心理学の根本的な手続き」¹² に他ならない。そして、こうした手続きを経ることで、心的事象は具体的かつ個人的な意味を失ってしまい、その主体から切り離されてしまう¹³。なぜなら、形式主義が明らかにするのは、規約的/慣習的な意味作用 *signification conventionnelle* でしかないからだ。ポリツェルは、実在論と形式主義によってもたらされる手続きを抽象化 *abstraction* と呼び、夢をはじめとした心理的事実を非人称的あるいは三人称的な原因に由来するものへと切り詰めてしまうその方法を、ドラマ的な生 *vie dramatique* にねらいをつける具体心理学の立場から鋭く批判する。

こうした文脈のなかで、精神分析における無意識概念が徹底的に批判される。というのも、ポリツェルに言わせれば、無意識概念は「実在論と形式主義の組み合わせによる歪曲」¹⁴ によって導き出されるものに他ならないからである¹⁵。「無意識は抽象化を前提としている」¹⁶ のであり、「精神分析のなかで無意識は、具体心理学のなかに抽象化がどの程度生き残っているかということしか表わしてはしない」¹⁷。さらには、「精神分析の斬新さと独創性は無意識の発見と探求にあるはずがない」¹⁸ と断じられる¹⁹。ここでポリツェルが批判するのは、心的装置におけるひとつの審級としてフロイトが理論化したところの無意識である。周知の通り、フロイトは哲学と宗教から距離を取りつつ、物理学を範とする科学のうちに精神分析を位置づけようとする傾向があった。また

実際に、精神分析を「無意識の心の過程についての科学」²⁰として位置づけてもいた。こうした傾向は、夢を扱うフロイトの手法にも見て取ることができる。フロイトは患者の夢の報告に対する独創的な解釈を、科学的発見に比肩する客観的説明へと引き上げる。そのひとつが、夢の顕在内容と潜在内容の区別にかんする理論化である。この区別に訴えつつ、夢には隠された真の意味　無意識的欲望の成就　が存在するというかたちで、フロイトは無意識という心的審級や夢作業という心的過程を実体化してしまう²¹。このような理論化は、患者の語りや分析家の解釈という具体的な行為に注目する

行為に先立つ「意味」なるものを想定しない

フロイトの革新的な方法がもたらした知見と鋭く対立する²²。この点をとらえて、フロイトによる「諸事実についての理論的練り上げ」においては「抽象化への回帰」²³が認められる、との指摘がなされる。ポリツェルにとっては、精神分析はもっぱら理論/学説 doctrine ではなく、方法としてのみ検討に値するのであり、「構造についての諸仮説は精神分析家には禁じられている。その態度の真の性格からして、精神分析家にはメカニズムを探究する権利を持たない」²⁴。

だが、ポリツェルによれば、古典心理学の实在論の痕跡をとどめていない概念が精神分析には2つあるという。それは同一化 identification とエディプスコンプレクス complexe d'Edipe であり、これらには「具体心理学が満たさねばならない重要な条件を満足させる二つの考え」が見出される、すなわち、「それらは私の次元にとどまっておらず、人間のドラマという素材から切り出される」²⁵との指摘がなされる。さらに、これらの概念は、特定の個人の生活の断片であるだけでなく、「固有の弁証法」²⁶をもち、個人の人生全体を貫き、その運命全体に決定的な影響をもつ諸行為において人生を方向づけているとされる。その限りにおいて、同一化とエディプスコンプレクスは一人称の「私」の行為であるとポリツェルは考える。

以上のように、ポリツェルは精神分析の方法抽象化を避け、具体的かつ個人的な意味や人間のドラマを出発点とする発想　を高く評価する一方で、無意識という心的審級を実体化するその理論/学説を徹底的に批判する。我々は、このような態度をラカンの学位論文である『人格との関係からみたパラノイア精神病』²⁷にはっきりと見て取るであろう。

3. 学位論文におけるフロイト理論と無意識概念

では次に、ラカンの学位論文を取り上げたい。まず指摘しておくべきは、ラカンの学位論文では、ポリツェルの名前は実際には一度も言及されていないという事実である。これは恐らく、医学学位論文において論争的な心理学者の名を出すことへのためらいゆえのことと推測される。しかし、自らが提唱した自罰パラノイアという臨床類型の価値について、ラカンが以下のように述べていることを確認するならば、我々はそこにポリツェルの影響を認めないわけにはいかないだろう。「それら(引用者註:自罰パラノイアの臨床的記述や理論的構想)の価値は、以下のことに由来する。すなわち、この精神病の原因と同様、その症状の研究においても、我々が具体的なものを参照しているということ...」²⁸。

無意識 inconscient という語の用法にかんして見ていくと、ラカンはいくつかの箇所ですべて「気づいていない/無自覚」という一般的な意味で用いていることが注目される²⁹。通常、ある日常語が特定の意味を担わされた専門用語として用いられる場合、それを日常語の意味でも用いることは混乱を招く恐れがあるため慎重に避けられるはずである。したがって、学位論文における inconscient の語は、精神分析の専門用語として厳密に用いられているとは言い難い。また、この語はその大半が名詞としてではなく形容詞的・副詞的に用いられており、フロイトのメタサイコロジーに踏み込むことを慎重に避けようとするラカンの意図が窺われる³⁰。

ところで、この学位論文において興味深いのは、フロイトが用いる欲望 Wunsch という概念 さらには症例エメの精神病 を、バートランド・ラッセルが『心の分析』(1921)で用いた「行動のサイクル cycle of actions」³¹ という考えを参照しながら、ラカンが論じているという点である。その説明によると、欲望とは有機体の情動的動揺に端を発し、多少なりとも方向づけられた運動性興奮を経て、ある体験が能動・受動を問わず情緒的・運動的平衡を回復した場合に満たされるという³²。そして、欲望を満たす体験は欲望の目的および対象として理解される。ところで、ラカンはここで、欲望の対象のイメージに無意識的な幻想 fantasme が対応しているか否か、換言すれば、欲望が無意識的であるか(あるいは意識的であるか)は重要ではないと指摘する。しかし、フロイトが精神分析においてねらいをつけたのは、無意識的欲望や幻想ではなかっただろうか。この点にかんして、ラカンは「とりわけ、精神分析が保持している意識的および無意識的欲望の対比は、もし欲望を行動のある種のサイクルによって客観的に定義するなら、消え去るように我々には思われる」³³と述べ、さらには無意識概念は欲望の目的という「もっぱら客観的な決定因 détermination」³⁴に対応すると指摘している。つまり、ラカンはここで無意識や無意識的表象、あるいは幻想といった抽象概念に訴えることを拒絶しつつ、欲望を具体的な行動から位置づけようと試みているのである。こうして、個体の行動をその全体性において理解可能にする動因として欲望は定義される。以上の議論から我々は、学位論文執筆時のラカンに対するポリツェルの影響をはっきりと見て取るだけでなく、そこで用いられる無意識の語はフロイト的メタサイコロジーを想定していないという事実を認めなければならないだろう。

また、学位論文においてラカンは、当時のフランス精神医学で主流であったパラノイアの体質論 constitutionnalisme に反して、反応性諸因子を強調したドイツ学派へと目を向けている。まず注目

されたのはオイゲン・プロイラーの主張であったが、加えてマックス・フリードマンやロベルト・ガウプへの言及に次いで、エルンスト・クレッチマーの『敏感関係妄想』³⁵での議論が検討される。そのなかで、クレッチマーにおける抑制 Verhaltung/répression という考えの重要性をラカンは強調する一方で、「抑制というこの反応様態は、例えばヒステリーの場合に辛い「思い出」を無意識へと押しやる抑圧のそれとは全く対立する」³⁶と述べ、フロイトの抑圧 refoulement 概念を暗に退けるかたちで論を展開している。クレッチマー自身は、ヒステリーにおける無意識への心的退避 seelische Ausweichung が不在である場合に、抑制というメカニズムが認められると述べている。その定義によると、抑制とは単なる保持 Retention 心的な統御 Leitung に影響しないものではなく、強力な情動を帯びた表象群を意識へと留め置くことであり、この時、心的統御を欠いた活発な活動が心的内部で繰り広げられるという。そして、このようなメカニズムに基づいた臨床的な反応類型を指し示すにあたって、クレッチマーは sensitiv の語を用いている。周知のとおり、クレッチマーは敏感性格 sensitive Charakter という人格構造と特定の葛藤状況から妄想が出現すると主張したが、これはパラノイアを人格と同等の「認識の現象」として位置づけるラカンの議論にとって強力な援護となった。

さらに、フロイト的概念はポリツェル流の解釈を加えられたうえで、すなわち、それが指し示すものが具体的なものとして読み替えられたうえで援用される。例えば、葛藤は二元論的に理解された欲動のあいだの葛藤ではなく、具体的な対人関係におけるそれとして、固着はフロイトが提唱したリピード発達段階への固着ではなく、病者によって生きられた状況への囚われとして³⁷、コンプレクスも無意識的布置ではなく、病者によって実際に生きられた状況として理解される。

ところで、ラカンは「パラノイア精神病の諸構造」(1931)において、「無意識の実践家達

techniciens (引用者註: 精神分析家達) は、パラノイアという極限において、それを説明できないとまではいかないが、治癒ができないということを告白している³⁸ と述べていたが、学位論文では症例エメで生じた治癒 自罰による治癒 に注目し、パラノイアの治癒について踏み込んで論じている。また、ナルシズムと自体性愛との区別や自我の性質についての議論に見られる混乱を挙げつつ、精神分析が精神病にかんして理論化したナルシスの固着 fixation narcissique という考えの不十分さをラカンは指摘する³⁹。こうした点からも、この時期のラカンは精神分析の理論/学説とは一定の距離を取っているように見える。

これまで、1932年の学位論文執筆時にラカンは既にフロイト主義者であったという指摘がしばしばなされてきた⁴⁰。しかし、以上の検討からも明らかなように、この時点ではフロイトの精神分析はラカンにとって、精神医学的研究に資する数ある理論的道具のひとつに過ぎないと考えるほうがむしろ適切であろう。

4. 1932年以降の無意識概念

では次に、学位論文以降のラカンの仕事における無意識概念について検討していこう。

「パラノイア性犯罪の動機」(1933)では、精神病の基底をなす病 affection としてあらわれる攻撃欲動 pulsion agressive が「無意識的 inconsciente」と形容される。ラカンによれば、攻撃欲動が無意識的であるとは、「それを意識へと翻訳する志向的内容が、主体によって統合された社会的要請との妥協なしには、すなわち、まさしく妄想そのものである諸動機 motifs というカムフラージュなしには顕在化されえない⁴¹」との意味であるという。つまり、我々はそれ自体を直接的に知ることはできず、そのあらわれは社会的なものに媒介されているということであり、無意識は心的審級として想定されているわけではない。また、パパン姉妹における「心理学的カプル」に言及する際に、精神分析家はパラノイア

を同性愛に由来するものとする傾向にあると指摘しつつ、そこでの同性愛とは「無意識」あるいは「潜在性 larvée」⁴²の同性愛であるとラカンは述べる。続けて、こうした同性愛は「激しい否定 négation éperdue」によってしかあらわされえないと述べられるように、ここでの「無意識」の語もまた直接的には把握することができないものという意味において用いられていると考えられる。

次に、ポリツェル流の批判が前面に押し出されている「現実原理の彼岸」(1936)において、無意識の語は1回のみ用いられるに過ぎない。「精神分析的経験の現象学的記述」と題された節で、ラカンは以下のように述べる。精神分析家は分析主体の語りに対して応答したいという衝動を差し控えることによって始めて、その語りの意味、すなわち、社会的関係における緊張をあらわす意志 intention を見出すことができる。しかし、言語はこの意志を字義通りのかたちで伝えるわけではない。この点について、ラカンは二つの在り方を指摘する。ひとつには、主体の語りにおいてその意志は表現されているのだが、当の主体には気づかれていないというかたち、いまひとつには、主体はそれを理解しているが、否定するというかたちである。そして、前者は象徴 symbolisme という形式、後者は否定 dénégation という形式として定式化される。以上を踏まえて、ラカンは「意志は経験において、表出されたものとして無意識的であり、抑え込まれたもの réprimée として意識的であることが明らかになる」⁴³と述べる。つまり、ここでは分析における具体的な場面に見出される象徴という表現形式との関連で、主体が気づいていないものを指し示すために、無意識の語は用いられているのである。

事典項目「家族」(1938)では、それまでのテキストに比べて無意識の語は多く用いられているが、そのほとんどがコンプレクスとイマーゴと関連している。例えば、コンプレクスは「失錯行為、夢、症状という意識によって管理されていない心的効果の原因」⁴⁴として明らかになり、無意識的形態においてその一

貫性 *unité* が際立つとされる⁴⁵。そして、イマージはコンプレクスの基本的要素であるところの「無意識の表象」という逆説的な実体 *entité* と位置づけられる。ここでは、無意識の語は意識によって直接的には不可知なものに対して、やはり形容詞的に用いられているに過ぎない⁴⁶。

また、エディプスコンプレクスの項では、「同性の親は子どもにとって、性的禁止の執行者と同時にその違反の見本としてあらわれる」⁴⁷ という指摘を踏まえ、同性の親のイマージは意識的には自我理想 *idéal du moi* として、無意識的には超自我 *surmoi* として、それぞれ昇華と抑圧という心的効果をもつとラカンは述べる⁴⁸。ところで、自我理想と超自我は「心的諸審級 *instances psychiques*」⁴⁹ として位置づけられてはいるが、「神経症諸症状の具体的な分析」において見出されたものであると断っているように、ラカンはこれらをフロイトのメタサイコロジーから慎重に遠ざけながら論じているように見える。他方では、ラカンはエディプスコンプレクスと人類学における知見との符合を指摘しながら、それらの「科学的価値」や経験によって裏づけられた実証性を強調している⁵⁰。

アンリ・エーの主催によるコロックでの発表、「心的因果性についての提言」(1946)では、ラカンは無意識概念を批判しつつ、自らの理論への組み入れがたさを吐露している⁵¹。エディプスコンプレクスについて言及するなかで、精神分析の理論/学説はエディプスコンプレクスの効果として示される反復の必然性を、「無意識という惰性的 *inerte* かつ信じがたい *impensable* 考え」⁵² によって説明しているとラカンは断じている。この批判の根拠については、これ以上のことは述べられていないのだが、先に言及した「家族」での議論を踏まえるならば、我々はそれを以下のように考えることができるだろう。すなわち、エディプスコンプレクスの効果は超自我と自我理想という二側面から検討されるべきであり、無意識の語を持ち出すことで事足りるとするのは、意識において作用する自我理想の働きまでも無意識の

次元へと還元してしまうことに等しいがゆえに、ラカンは精神分析の学説/理論を批判するのだ、と。

さらに、この時期のラカンにとってはイマージのような「イマジネールな様式」⁵³ が有する心的効果 心理的なものと生理的なものを接続する効果がその関心の中心にあったことも決して無関係ではない。フロイトが象徴や圧縮として取り上げた諸構造を、ラカンはイマジネールな様式を有していると考えており、それらが「意識においてあらわれるもの」であると述べている。それゆえ、それらを不用意にも無意識の語を用いて論じることは慎重に避けられねばならないのである。いずれにせよ、この時点にあっても、無意識概念はラカンにとって問題を孕んだものであったことが理解される⁵⁴。

「精神分析における攻撃性」(1948)においても、無意識の語はイマージとの関連で、「我々が主体の無意識と呼ぶ象徴的多重決定の平面に恒久的に存在し続けているイマージ」⁵⁵ というかたちで取り上げられている。また、このテキストでは、フロイトが直面した理論的困難について、それは古典心理学の手法に倣って自我を知覚-意識システムとの関連において定義したことに由来しているという指摘がなされている。ラカンによれば、自我は知覚-意識システムにおいて(客観的な)「現実」への適応を担うものでは決してなく、むしろ自我は同一化によって形成される対象として位置づけられるべきであり、その限りにおいて暗点を有しているという。つまり、自我とは「何か」を無視し、「何か」について決して知ろうとはしないのであるが、この「何か」こそ、自我にとっての無意識 それ自身の生成におけるイマージへの同一化という構造的決定因 に他ならない。

他方で、「精神分析的行為 *action* は言語的コミュニケーションにおいて、そして言語的コミュニケーションによって、すなわち、意味 *sens* の弁証法的な把握 *saisie* において展開していく」⁵⁶ とラカンは述べ、そのなかで無意識は明らかにされると主張する。以上を踏まえるならば、古典心理学に拠ったフロイ

トの困難は、人間においては自我が認識の主体であると考える誤謬に、あるいは、言語行為を通じた意味の弁証法の力によって人間が「無意識の境界 limites」⁵⁷ を開くことができるという事実を見落としていることに由来すると理解できよう。

5. おわりに：社会的なものへのラカンのまなざし

ここまで概観してきたラカンの思索には、無意識概念を実体化や抽象化を避けながら、内面性 *intérieurité* と無関係なかたちで定義せんとするための歩みが見出される。これはまた、無意識を個人へと還元することなく、社会的なものとの関係において思考するという方向性を有していた⁵⁸。このことは、ラカンが学位論文においてパラノイアを「心的統合」すなわち「人格」の特異な障害、さらには「認識の現象」と位置づけつつ、「人格の社会的起源」⁵⁹ を強調していたという事実にはっきりと認められる。そして、このような発想にかんしてラカンに影響を与えた人物のひとりとして、学位論文にもその名が言及されているリュシアン・レヴィ＝ブリュル (1857-1939) を挙げることができるだろう。

レヴィ＝ブリュルは、いわゆる未開人に特有の思考、すなわち原始的思考 *pensée primitive* に前論理 *pré-logique* と形容される心性 *mentalité* を指摘し、その原理を融即律 *principe/loi de participation* として定式化した。「A は B かつ非 B であることはできない」という矛盾律に反して、融即律は「A は B かつ非 B である」という事態を可能ならしめる原理であり、『未開社会の思惟』(1910)⁶⁰ では、ブラジルのボロロ族が自分達をコンゴウインコとみなす例が挙げられている⁶¹。ここで重要なことは、前論理的思考は論理的思考への展開の前段階やその欠損ではなく、むしろ論理的思考とは全く別の思考様式とレヴィ＝ブリュルが考えた点にある。ある社会に特有の心性は、その社会の構造によって規定される集合的表象 *représentation collective* によって方向づけられているのであり、集合的表象が異なれば心性も異なる。融即律とは

原始的心性を特徴づける集合的表象がもたらす原理であり、情動的あるいは神秘的なものとしての表象は人間の知覚そのものにも影響を与える。つまり、現実の認識や振る舞いの規則をかたちづくるのは、社会的なものに媒介された心性あるいは思考の形式なのである。ところで、矛盾律を意に介さないという前論理的思考には、フロイト自身が「矛盾を知らない」という在り方を指摘した無意識との近親性が認められる。そして、前論理的思考と同様に、無意識は意識や理性の欠損では決してなく、それ固有の論理をもつと考えるならば、ポリツェルが批判した生物学主義に陥ることなく、さらには内的表象 *Vorstellung* に訴えることなく、無意識概念を社会的なものとの関連において再考する道は拓かれるだろう。

以上より、レヴィ＝ブリュルのみならず、マルセル・モース (1872-1950) やクロード・レヴィ＝ストロース (1908-2009) らの仕事を参照しながら、無意識概念の受容を中心としたラカンの理論形成に社会学や人類学が及ぼした影響を検討することがさらなる課題として明らかになってくるが、それに取り組むことはまた別の機会に譲りたい。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 JP21K00104 の助成を受けた。

脚注

¹ 例えば、立木康介は「そもそもラカンには抑圧についての固有の理論が存在しません」と述べている。とはいうものの、ラカンに従って抑圧を定義する可能性として、シェーマLにおける a-a' の軸（イマジネールなコミュニケーション）による 他者 A から無意識の主体 S へのメッセージの遮断と、ソシユールのアルゴリズムを反転させたシニフィアン/シニフィエの図式の「意味の抵抗のバー」への言及がなされている。

十川幸司、原和之、立木康介（2010）座談会 来るべき精神分析のために、思想（1034）、岩波書店

² Politzer, G.(1928) *Critique des fondements de la psychologie: la psychologie et la psychanalyse*. Rieder.(『精神分析の終焉—フロイトの夢理論批判』、寺内礼（監修）、富田正二（訳）、三和書籍、2002年）

なお、仏語版は Édition numérique hors-commerce (PDF) を参照している。引用頁は仏語版と邦訳を併記しているが、訳文は仏語版からの筆者の翻訳による。

³ *ibid.*, p.14: 邦訳 50 頁.

⁴ *ibid.*, p.15: 邦訳 52 頁.

⁵ *ibid.*, p.54: 邦訳 141 頁.

⁶ *ibid.*, p.15: 邦訳 53 頁.

⁷ 別の箇所では、「根本をなす閃きと理論的上部構造とのあいだの永続的な葛藤」(*ibid.*, p.73: 邦訳 182 頁) との表現が見られる。

⁸ *ibid.*, p.90: 220 頁.

⁹ *ibid.*, p.18: 60 頁.

¹⁰ *ibid.*, p.41: 111 頁.

¹¹ ポリツェルによれば、心理学は一人称の諸事実（主観的なもの）を三人称で（客観的に）研究する「第三の科学」であろうとし、自らを独創的な科学であると主張するのだが、このような「奇跡」を可能にするのが、心理学が自らへと取り入れる实在論である。实在論が要請する「知覚の真正さ originalité」(*ibid.*, p.24: 邦訳 74 頁) を後ろ盾に、心理学は特殊な手続を必要とせず、物理的世界と並行であるスピリチュアルな世界を説明する「パラ物理学」となると自認するのだが、そこではもはや神話しか生み出されないとポリツェルは批判を加える。

¹² *ibid.*, p.12: 邦訳 46 頁.

¹³ 「心理学者が人間のうちに認めようとする全体性 totalité は、「機能的」全体性、類 classe の諸概念が複雑に絡み合ったものでしかない。ところで、このような絡み合いというのは、複雑さの程度がどうであれ、ひとつの行為ではないし、ある主体 sujet ではなく機能的中枢を想定している」(*ibid.*, p.26: 邦訳 78 頁) とポリツェルは述べ、「心理学は誤った全体性によって抽象化の次元にとどまっている」(*ibid.*, p.26: 邦訳 78-79 頁) と指摘する。他方で、精神分析は夢をはじめとした無意識の形成物や症状を取り扱う際、古典心理学のように原子論的要素から出発するのではなく、ある具体的な個人の生活を参照する。ここに認められるのは、心理的なものとは主体的な経験という全体性を有しており、個々の諸要素はあくまでその全体性においてはじめて位置づけられうるという発想であり、具体的な個人の生活——ポリツェルの表現を用いるならば個人的ドラマ——は、個々の感覚器官による知覚へとは還元不可能なものとして位置づけられる。

¹⁴ *ibid.*, p.82: 邦訳 202 頁.

¹⁵ そして、「一般に、諸事実を無意識の証拠に変えてしまうのは实在論的要請だけである」(*ibid.*, p.81: 邦訳 199 頁) とポリツェルは述べる。

¹⁶ *ibid.*, p.75: 邦訳 186 頁.

¹⁷ *ibid.*, p.75: 邦訳 185 頁.

¹⁸ *ibidem.*

19 さらに、ポリツェルは以下のように述べながら、無意識概念が精神分析にとっての躓きの石でしかないと主張する。「力動的な無意識であっても、それは精神分析の真に興味深い発見であるどころか、実際にはその理論的な無力さを示している」(*ibid.*, p.91: 邦訳 221 頁)。

20 Freud, S.(1926) *Psycho-Analysis. G.W.,14., S.300.* (「精神分析」、大宮勘一郎(訳)、フロイト全集第 19 巻、岩波書店、218 頁)

21 夢には真の意味——偽装の下にある原テキスト——が存在するという考えを、ポリツェルは以下のように述べながら批判している。「夢の象徴は必ずしも「原テキストの偽装」などではない。実際には、その諸要素は思いもよらない弁証法、それを分析することが問題であるような個人的な弁証法に取り込まれているのであり、分析によって、この弁証法がどのようなものであるのか、夢の原因である形態 *forme* やモニタージュがどのようなものなのかが我々に示されるはずである。しかし、それは何か分からない「原テキスト」にまで遡ろうとすることではない」(*ibid.*, p.87: 邦訳 212 頁)。

22 「精神分析家によって用いられる手法を特徴づけるのは...我々が説明しようとした実在論的な手続きを含意していないことである」(*ibid.*, p.46: 邦訳 122 頁)とポリツェルが指摘するように、自由連想という方法は、意識による内観へと訴え、実在すると想定された内面について話すのではなく、むしろ話すという行為、意識の働きを打ち破るような語りを導き出す実践にねらいを定めている。

23 *ibid.*, p.112: 邦訳 269 頁.

24 *ibid.*, p.53: 邦訳 138 頁.

25 *ibid.*, p.109: 邦訳 262 頁.

26 *ibid.*, p.110: 邦訳 263 頁.

27 Lacan, J.(1932/1975) *De la psychose paranoïaque dans ses rapports avec la personnalité.* Seuil.

28 Lacan, (1932/1975) *op. cit.*, p.316: 邦訳 332-333 頁.

また、その結論部において、以下のようにもラカンは記していた。「我々の〔引用者註：自罰パラノイアという〕類型の臨床的価値はまず、我々が従来 of 抽象的な構想を放棄する程度そのものに依じて、我々がそれに与えた臨床的描写にある」(*ibid.*, p.347: 邦訳 365 頁)。

さらに、ラカンは自らの研究活動報告において、学位論文について、「我々の研究のオリジナリティは、少なくともフランスにおいては、ある典型的な妄想の諸精神現象を、可能な限り完璧な調査によって再構成された主体の具体的な歴史との関連で徹底的に解釈を試みた最初のものだという点にある」と述べている。

Lacan, J.(1933/1975) *Exposé général de nos travaux scientifiques. De la psychose paranoïaque dans ses rapports avec la personnalité.* Seuil. p.401.

29 例えば、*ibid.*, p.211: 邦訳 225 頁、あるいは *ibid.*, p.310: 邦訳 326 頁。

30 参考までに、その一部を以下に表で示す。

用法	引用箇所
無意識的なリビード的告白	p.261/279 頁
無意識的願望、無意識的愛	p.264/282 頁
無意識的な性的魅惑	同上
無意識的な情動の葛藤	p.272/290 頁
無意識的現実	p.280/297 頁
個人間の「無意識的」相互反応	p.286/302 頁
患者の自我理想の...「無意識的なあらわれ(自罰傾向)」	p.316/333 頁

31 Russell, B.(1921) *The Analysis of Mind.* George Allen & Unwin.

32 行動のサイクル *cycle de comportement* をもとに欲望を定義するというラカンの発想は、人格概念を展開していく構造として定義する議論の方向性とうまく合致する。

33 *ibid.*, p.44: 邦訳 377 頁.

34 *ibid.*, p.311: 邦訳 327 頁.

35 Kretschmer, E.(1918) *Der sensitive Beziehungswahn*. Springer.

36 *ibid.*, p.90: 邦訳 83 頁.

37 リビド理論は当時の物理学におけるエネルギー論に大幅に依拠するかたちで構想されており、それゆえにポリツェルにとっての批判の対象となった。対して、ラカンはリビドにかんして、「フロイトの革新は、非常に多様な現象に共通の尺度として役立つエネルギー論的概念を心理学にもたらしたという点で重要であるように思われる」(*ibid.*, p.256: 邦訳 274-275) と述べている。さらに、リビド概念の「相対的な不明瞭さ」を指摘しつつも、この不明瞭さゆえに、「実際、物理学におけるエネルギーあるいは物質 *matière* という概念と同じ普遍的な射程を有しており、それゆえに、あらゆる科学の基礎であるエネルギー恒常性の法則の心理学への導入を予見することを可能にする最初の概念をあらわしている」(*ibidem.*) という見解を示していた。

38 Lacan, J.(1931) *Structures des psychoses paranoïaques*. *Semaine des Hôpitaux de Paris*. n° 14, p. 445.

39 ちなみに、自我の性質にかんして、精神分析の理論/学説では「知覚-意識 *Wahrnehmung-Bewusstsein* や前意識的機能と同一視されるが、やはり部分的にはこの学説に固有の意味で同じく無意識である」(*ibid.*, p.322: 邦訳 339 頁) とラカンは指摘しているが、自我を知覚-意識システムとの関連においては位置づけないという考えはラカンにおいて一貫して認められ、後の自我心理学批判につながる。

40 例えば、エリザベート・ルディネスコの指摘が挙げられる。

Roudinesco, E.(2009) *L'histoire de la psychanalyse en France - Jacques Lacan*. Livre de Poche. p.1587.

41 Lacan, J.(1933/1975) *Motifs du crime paranoïaque: Le crime des sœurs Papin*. *De la psychose paranoïaque dans ses rapports avec la personnalité*. Seuil. p.26.

42 *ibid.*, p.28.

43 Lacan, J.(1936) *Au-delà du principe de réalité*. *Écrits*. Seuil. p.83.

44 Lacan, J.(1938) *Les complexes familiaux dans la formation de l'individu*. *Autres écrits*. Seuil. p.29.

45 だが、コンプレクスはもっぱら無意識において作用するわけではなく、意識の水準でもその作用が認められるものでもあるとラカンは考えていた。「コンプレクスは意識において、人格へと最高度に統合されているように見える現象を支配している。また、熱情的な弁明のみならず、客観化可能な合理化までもが無意識において動機づけられている」(*ibid.*, pp.29-30)。

46 鏡像段階について論じた節では、「無意識の分析」(*ibid.*, p.42) を通じて、その奥底には人間世界の太古的構造が身体の分断あるいは分解のファンタズムとして残されていることが示されたとラカンは述べている。ここでは、無意識の語は名詞的に用いられてはいるものの、そこにはメタサイコロジー的含意はないと考えてよいだろう。

ちなみに、ラカンは分析経験からの素材をもとに、去勢ファンタズムには身体寸断のファンタズムが先行していると主張しているのだが、これは鏡像段階論の根幹をなす考えである。また、ラカンは「分析の理論/学説の最も目に付く欠陥」として、「力動性のために構造を無視する」(*ibid.*, p.51) という傾向を指摘しつつ、以下のようにも述べる。「〔引用者註：精神分析の〕学説/理論が去勢ファンタズムを現実の脅威に関係づけたのは何よりもまず、力動的諸傾向を見分けることにおいて天才的な力動論者であったフロイトが、伝統的な原子論のために、形態の自律性という考えに対しては閉ざされていたからである。こうして、女兒における去勢ファンタズムや両性にお

ける母のファルスのイメージの存在を観察するとき、フロイトはそれらの諸事実を男性の優位性の早熟な発見、女兒を男性性への憧憬へと、また〔引用者註：性別に係わらず〕子どもを母は男性的であるとする考えへと導く発見によって説明することを余儀なくされる。だが、その発生論は同一化にひとつの根拠を見出すとはいえ、余計なメカニズムを用いることを必要とするので、誤りであるように思われる」(*ibid.*, p.52)

⁴⁷ *ibid.*, p.46.

⁴⁸ ラカンによれば、エディプス的同一化によってあらわれる両親のイマージは、一方では超自我として作用し、無意識的なかたちで性的機能を制止し、他方では自我理想として作用し、性的機能が将来において回帰する道筋を準備しつつ、意識においてはそれは無視されるという限りにおいて、相矛盾する機能を有しているという。また、性格神経症について論じる際には、「超自我と自我理想は実際、主体の構造の諸条件である」と述べながら、それらは「自我の生成のなかで、その干渉によって引き起こされる崩壊 *désintégration*」(*ibid.*, p.78) を症状において明瞭に示すとラカンは指摘している。

⁴⁹ *ibid.*, p.47.

⁵⁰ ここでラカンは、自らの学位論文での主張と関連づけながら、超自我と自我理想という審級の科学的価値を以下のように主張している。「神経症症状において超自我と自我理想という名のもとに取り出された心的諸審級は、人格をめぐる諸現象の定義と説明においてその科学的価値を示した。そこにあるのは、人間の行動の多くの異常 *anomalies* を説明し、同時に、そうした障害について器質的な次元への参照、この参照は純粹に原理的もしくは単に神話的でありながら、ひとつの医学的伝統全体にとっては実験的方法の代わりになっているものであるが、そうした参照を時代遅れのものとする、実証的な決定因の次元である」(*ibid.*, p.46)

⁵¹ このテキストにおいて、ラカンはポリツェルの名を挙げ、自らが「科学において真の具体理学をつくりあげる」という要請に取りかかり始めたところであると述べている。

Lacan, J.(1946) *Propos sur la causalité psychique. Écrits. Seuil. p.161.*

⁵² *ibid.*, p.182.

⁵³ *ibid.*, p.183.

⁵⁴ また、以下のような指摘には、精神分析的な手法は無意識的な決定因を明らかにしたが、それに対して効果的な介入をおこなうには至っていない。そして、これを明らかにするのが自らの仕事である。というラカンの考えが示されているように思われる。「精神分析の洗練された手法によってそれを扱うまでは少なくとも、無意識へとはその原因を決して帰することのなかった厄介事へと、私の無意識はこの上なく平然と私を連れ去っていく。さらに、こうした手法にもかかわらず、私の意識がいつもこの上なくひどく無自覚である頑としたエゴイズムでもって、私は他者たちに対して振る舞ってしまうのである」(*ibid.*, p.159)

⁵⁵ Lacan, J.(1948) *L'agressivité en psychanalyse. Écrits. Seuil. p.108.*

⁵⁶ *ibid.*, p.102.

⁵⁷ *ibid.*, p.116.

⁵⁸ ラカンは「イギリス精神医学と戦争」(1947)において、ジョン・リックマンやウィルフレド・ピオンの名を挙げながらグループ *groupe* や集団 *collectif* の力動が個人に及ぼす影響について肯定的に論じている。

Lacan, J.(1947) *La psychiatrie anglaise et la guerre. Autres écrits. Seuil.*

⁵⁹ Lacan (1932/1975) *op. cit.*, p.42: 邦訳 39 頁。

⁶⁰ Lévy-Bruhl, L.(1910) *Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures. Felix Alcan.*

⁶¹ 人格の社会的起源を主張し、人類学の知見に関心を抱いていたラカンは、自己同一性の問題にかんして当初からポリツェルとは異なる見解を持っていたかもしれない。というのも、ポリツェルが一人称の「私」を個人のドラマの根底に据え、その同質性や連続性、安定性を想定するのに対して、ラカンは社会的緊張関係において「私」は不断に生成されると考えるからである。